

【特別・嘱託・協同研究員の研究】

【要旨】 イェシエー・ペルデン著  
『モンゴル仏教史・宝の数珠』  
チベット・モンゴル語対照訳注 (3)

伴 真 一 朗

本訳注は、三宅伸一郎、松川節、伴真一郎「イェシエー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』チベット・モンゴル語対照訳注(1)」、及び伴真一郎「イェシエー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』チベット・モンゴル語対照訳注」(2)の続きである。(3)ではチベット語の9b6、モンゴル語の9v9まで訳注を行った。モンゴル帝国第二代ハーンのおゴディから元朝(大元ウルス)の成立、そして北元の初期までのモンゴルの歴史について述べた箇所である。本訳注で明らかになった問題点は以下の通りである。

1. チベット文とモンゴル文の対照について

この問題点の解明は、本訳注の重要な目的の一つであるチベット文・モンゴル文テキストの成立の前後関係を、明らかにする手掛かりになるであろう。まず挙げられるのがチベット文とモンゴル文の厳密な対応関係である。モンゴル文テキストで修飾語が被修飾語の後ろに後置されるチベット文的な形式は今回訳注を行った範囲でも見られる。

注10で指摘しているように、チベット語文献『パクサムジョンサン』(PSJZ)でも類似の形式が見られる構文があるが、本書のモンゴル文テキストでは一字一句に至るまで厳密に本書のチベット文に対応している。

また、注18で指摘しているように、モンゴル文テキストには、チベット語の語彙の慣用的な意味を理解せず直訳したのために、チベット文と文意が異なった語彙になっている箇所がある。チベット文「senge (獅子の) sgra (声) 'i sgonas (によって)」に対応するモンゴル文は「senggeda (獅子) -yin (の) egüden (口) -eče (によって)」であるが、このモンゴル文はチベット語の sgra を声と

解さずに音写し、sgo nas の慣用的な意味「～によって」と解さずに sgo を字義通りに「口」と直訳したと考えられる。

同様の事例は注 20 で指摘した箇所にも見られる。チベット語 byang ngos (北側) は涼州を含む河西地域を指す地域名として用いられているが、対応するモンゴル語は jĕgün tal-a (東側) である。これはチベット語 byang ngos を固有名詞と解さずに字義通り直訳しようとした上で誤訳したと考えられる。

一方でチベット文の厳密な直訳とは異なるモンゴル文も見られる。たとえば主君が在世するという意味の語をチベット文は zhal bzhugs (いらっしゃる)、モンゴル文は serigün tungyulay (はっきりと目覚める) とする。モンゴル語 serigün には regain one's spirits という意味があることから、両言語文化における死生観の違いが伺えるようで興味深い (注 8 を参照)。

また、チベット語で順接の助詞 ste に当たる部分はモンゴル文は共有格の接尾辞 luy-a のように、文法的に意味の異なる助詞が対応している箇所も見られる (注 32 ; 37)。

その他、チベット文テキストでは外来語の音写にも関わらず、モンゴル文テキストではチベット語と解釈した事例がある (注 40 の Nutuy bin)。

## 2. 北元初期の歴史記述について。

1368 年において元朝は中国より退いてモンゴル高原に本拠を置いた。新しく中国の支配者となった明朝はこのモンゴル勢力を故元と呼んだが、現在の歴史学では高麗による北元という呼称が定着している。この北元が成立した時期の歴史については、『パクサムジョンサン』及び本書では 17 世紀以降に成立したモンゴル語年代記と類似した記述である (注 60 ; 61)。本書の成立背景を考える上での手がかりになるであろう。

また、本書では、元朝最後の皇帝トゴン・テムルがモンゴルで即位する際にチベット語・モンゴル語テキスト双方が非敬語を用いているが、死去する記述は敬語である (注 60 ; 61)。敬語・非敬語の用法に何らかの理由や規則性が見出せるかは今後の検討の課題であろう。

### 3. 世界地理の記述について

元朝が征服したとされる広範囲の地域に関して述べられた箇所がある。地名に関しては全てを比定できなかったが、その中のチベット語 *gzhi ben* は日本を指していると論じた（注40）。読者の教示を仰ぎたい。

